

アールス（夏作）

<地帯区分:熊本Ⅱ・Ⅲ>

品種 \ 月		3	4	5	6	7	8
夏作	セイヌ夏Ⅱ (平坦地)	○	~~~~~	◎	~~~~~	※	~~~~~
	セイヌ春Ⅱ (中山間地)	○	~~~~~	◎	~~~~~	※	~~~~~
	サンデー盛夏型	○	~~~~~	◎	~~~~~	※	~~~~~
	雅春秋	○	~~~~~	◎	~~~~~	※	~~~~~
	雅夏	○	~~~~~	◎	~~~~~	※	~~~~~
	雅夏2	○	~~~~~	◎	~~~~~	※	~~~~~
	パリス春Ⅱ(赤肉)	○	~~~~~	◎	~~~~~	※	~~~~~
	主な作業	播種		定植		摘心・交配	

技術体系

交配期以降は高温下での栽培となり、連棟ハウスでは高温となりやすいので、できるだけ単棟ハウスとする。

1 作型の特徴

この作型は育苗期の一部の期間を加温し、定植後から収穫期を無加温で栽培するものをいう。収穫期は7月上旬から8月下旬になる。

夏作は育苗から交配まで適温下での栽培であるが、交配～収穫期は高温となるので、過剰肥大やそれに伴うネット形成不良などが発生しやすい。さらに収穫時には黄化葉症、急性萎ちょうなども発生しやすく、その場合糖度不足につながることもある。高温であるため病害虫の発生も多く、不良環境下での栽培となる作型である。

栽培管理では温度・湿度管理ができにくく、土壌水分管理が中心とならざるをえないため、作型、土壌条件に適する品種選定がより重要になる。

2 適応地域

中山間地域

3 栽培条件

(1) 圃場条件

梅雨を経過する作型であるため、排水が良好な圃場を選定する。

4 施設装備

(1) 単棟

5 経営目標

- | | |
|------------|---------------------|
| (1) 収量 | 3.4t / 10a |
| (2) 投下労働時間 | 400 時間 / 10a (ポット苗) |
| (3) 所得率 | 60 % / 10a |
| (4) 経営規模 | 25a
(家族労働力2人の場合) |

栽培技術

1 品種と特性

交配から収穫期まで高温下での生育であるため、①草勢が強く、②不良環境下での雌花の着生、質が安定していること、③着果後、果実が硬化し、過剰肥大しないこと、④収穫後の軟化・黄化が発生しないこと、⑤高温下でも糖度が確実に14度以上となることが夏作における品種選定のポイントである。

「セイヌ夏Ⅱ」

草勢はやや強く、草姿はコンパクトで、葉は立性である。雌花着生は不良環境条件でも安定している。果実は締まりやすく、ネットは良く盛り上がる。高温期の収穫でも糖度はのりやすく、果実の黄化は発生しにくい。

「雅夏」

草勢は「雅春秋」よりやや強く、果実の硬化も強い。草姿は半開帳性で葉も大きい。ネットはやや密に発生する。果皮は灰緑色。果実の黄化は発生しにくい。

「雅夏2」

草勢は強く、葉は立性で、高温期でも徒長しにくい。果皮は灰白色で、ネットは太く、盛り上がりやすい。果実の黄化は発生しにくい。

「サンデー系」(盛夏型)

草勢は強く、草姿は開帳性で葉も大きい。果実は締まりやすい。収穫時の果重が 1.2 ～ 1.3kg 以下であれば発酵果となりやすい。食味は極良である。果皮は灰緑色である。収穫後の果実は温度にもよるが、6 ～ 7 日程で黄化する。

「パリス春Ⅱ」・「セイヌ春Ⅱ」

春作の項と同じ

2 育 苗

(1) 播種量

2300 粒／10a を基準とする。

(2) 黄化症、黄化えそ病等の対策

黄化症、黄化えそ病等の対策として、育苗ハウスには、コナジラミ、アザミウマ、アブラムシの侵入防止等を図るため、近紫外線カット(UVカット)フィルム、0.4m m以下の防虫ネット、黄色や青色の粘着板や黄色粘着テープを使用する。

また、育苗ハウスの周りに反射マルチを設置する。

(3) 播種時期

夏作は梅雨を経過し、多雨、日照不足あるいは高温障害を受けやすいので、栽培地の立地条件や品種特性に応じた播種期とする。(作型表参照)

(4) 育苗管理

ア 播種

ハウス 10a 当り野菜専用育苗箱 10 個を準備する。播種床は排水の良い無病の床土を用いる。発芽温度は 28 ～ 30℃である。

3 月上～中旬播種は地温が低いと発芽揃いが悪くなるので注意する。地温と水分が適正であれば、催芽は不要である。

イ 鉢上げ

鉢上げは子葉の展開直後に行う。子葉が完全に展開してからの鉢上げは生育が遅れやすい。また、

深植えは避ける。

ウ 鉢上げ後の温度管理

定植後から高温下での生育となるので、苗はガッチリとした苗とし、徒長しないように日中は十分換気する。

エ 育苗日数

3 月～4 月で 25 ～ 28 日(本葉 2.5 枚)で、鉢は 9 cmポリポットを用いる。5 月播種では 7.5 cmポリポットを使用し、20 ～ 25 日(本葉 2.0 枚)で定植する。育苗日数が長くなると老化苗となり、定植後の草勢が確保できにくくなるので鉢底の穴から根が見え始めて 4 日以内に定植する。

(5) セル育苗

50 ～ 72 穴のセルトレイに直播きする。床土はセル育苗用の購入床土を使う。セル育苗では発芽を一斉にさせることが重要である。播種前に十分灌水し、覆土後は灌水しない。

50 穴で本葉 2.5 枚まで、72 穴では本葉 2.0 枚で定植する。定植が遅れると急速に老化苗となり、本圃での初期生育に支障が出やすい。温度管理はポット育苗と同様である。正常なセル苗は定植後、ポット苗より草勢が強くなりやすいので注意する。

3 定植準備

(1) 土壌消毒

つる割病、センチュウの発生が心配される場合は土壌消毒をする。

(2) 定植準備

施肥・畦立て・マルチは春作ほど急ぐ必要はない。マルチは黒かシルバーマルチを用いる。

マルチングは畦のみとし、ハウス内の温度を防ぐ。

畦は 30cm 以上の高畦とし、土壌水分を調節しやすいようにする。

梅雨時期を経過する作型であるので、ハウス周囲に排水溝を堀り、ハウス内への雨水の浸入を防ぐ。

(3) 施肥

堆肥・土壌改良材として完熟堆肥 3 t／10a と石灰を施用する。施肥にあたっては基肥中心とする。このうち 20 %は速効性の肥料とする。高温期の栽培であり生育をやや旺盛にするため、全作型の中では最も多肥となる作型である。交配期に草勢が弱いようであれば、追肥を行い、生育後半に草勢が落ちないようにする。

	施肥量(kg / 10a)			備 考
	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	
基肥	15	15 ～ 25	15	基肥中心とする。
合計	15	15 ～ 25	15	pH は 6 ～ 6.5

4 定植作業

(1) 定植作業

若苗定植とし、草勢確保と雌花着生安定化のために活着促進をはかる。梅雨期を経過する作型であるので地際部を乾燥させるよう浅植えとし、定植後は根鉢に灌水する。

(2) 栽植様式

畦幅 1.3m、株間 37cm で 2100 株/10a を基準とする。

5 定植後の管理

適温下での生育であるので活着は容易である。

定植直後は最高気温を 30℃、最低温度は 18℃で管理し、日中は徐々に換気を強くして、軟弱徒長しないよう、締まった草姿にする。

夏作は高温下での栽培で、後半草勢が低下しやすい。したがって定植から交配期まで草勢を強く作り、後期まで草勢を低下させないよう管理する。

(1) 誘引・整枝

本葉 5 ～ 6 枚ごろ株元を立てた状態で 15 cm 程度の高さで、ひも又は支柱に固定誘引する。誘引時に主枝が 70 cm 程度伸びたとき生長点の高さを揃えて誘引する。夏作の生育は早いので遅れないようにする。

下葉の除去は 5 ～ 6 枚時に子葉と本葉 1 枚、9 ～ 10 枚時に下葉 2 枚を除く。側枝は先端部の生育を揃えるようにして、本葉 10 枚まで除去する。

(2) 結果枝の決定

結果枝の決定は草勢も考慮し、草勢が強い場合は 10 節から 2 ～ 3 本、草勢が弱い場合は 13 ～ 15 節に 2 ～ 3 本残す。同時に子房の着生の有無、果形を確認して決定する。

(3) 主枝の摘心

摘心は 5 月では交配の前日、6 月では当日に行う。摘心位置の葉はこの時、半開が良い。着果節位より上に葉数を 8 ～ 10 枚残し摘心する。

(4) 結果枝の摘心

結果枝の摘心は第2節で交配前日か当日に行う。

(5) 交配

交配はミツバチで行う。ミツバチの箱はハウスの外に置き、サイドから行き来できるようにしておく。

ミツバチの場合、農薬の残効性を考慮して交配前に予防散布をしておく。

交配日は必ず毎日印を付け、収穫期の判断にする。着果し、肥大が始まった果実は花卉を除く。

(6) 摘果・玉つり

幼果が卵大(4cm 径)のとき良形果 1 果を残し、他は摘果する。その場合キズがつかないように注意する。縦長で肩と果頂部の形が良く、果梗が短く、花座が小さいものを残す。摘果に当たってはなるべく着果日が同じで、肥大の揃ったものを残す。

玉つりは結果枝の先端がやや高くなるようにつる。

(7) 袋かけ

袋かけの目的はネット発生をしやすくすること、果面を白くするためである。夏作では光線が強く、乾燥しやすいので、横ネット発生までには新聞紙 1 ページ分の大きさで袋かけを行う。半ページ程度では果皮が色むらとなりやすい。

(8) 灌水管理

ア 活着から交配期

活着したら灌水を止め、畦面も徐々に乾燥させていく。

イ 着果から果実硬化期

着果を確認したら、少量の灌水を行い初期肥大の促進を図る。縦ネット発生までに果径 10cm 程度まで肥大させておく。この時の灌水は果実硬化期まで土壌に過剰な水分が残らないようにする。もし着果後の果実の縦伸びが旺盛ならば、この時の灌水は控える。

硬化期から縦ネット発生期までは畦を乾かす。この時に果実が硬化しているのに、過剰水分があると大割れし、ヒルネットになりやすい。硬化しないまま縦ネット発生期にはいり、過剰水分があると過剰肥大し、坊主玉となる。

ウ ネット発生期

果実硬化期に入る頃より、果実の音を確認するとともに色の変化を観察する。緩みを確認したら、灌水を開始する。最初は少量灌水とし、徐々に増やしていく。2次ネット発生期には最高とする。この時期には湿度確保のために畦間に少量散水する。

エ 仕上げ期

着果から 30 日程でネットの仕上げになる。この時期は土壌水分は極度に乾燥させないようにして、終期まで草勢の低下がないようにする。

6 収穫

アールスメロンの着果から成熟までの積算温度は品種により差はあるが、1200 ～ 1400 ℃の範囲である。日数では 7 月で 53 日、8 月上旬で 50 日、8 月下旬で 47 日程である。